

昔、僕の姉は透明人間

高一 安部井 孝太

僕の二番目の姉は、昔、僕にとって透明人間でした。なぜかという、その存在を認めたくなかったからです。父・母・姉と違い、歩けず話せず、人と違う食べ物を食べていたり、たえずヨダレが出ていて汚く見えていたから姉が嫌いでした。そして、そんな姉に関わりたくなく、変な物を見るように近づきませんでした。

姉と一緒に街を歩けば、小さい子からは変な目で見られるし、大人の人からも冷たい目で見られるのが嫌で、一緒に歩きたくありませんでした。

そして、姉がいなければ普通の生活ができるだろうと思っていました。小学校低学年の時は、ずっと母が姉に付きっきりで、しかも通院やいろいろな活動で外出も多く、僕といてくれる時間がとても少なく、母が一時期僕のことを何も構ってくれない、僕を嫌いなのではないかと思っていた時期もありました。今の自分から見ても嫌なガキだと思います。しかし、小さかった頃の気持ちでは、それが普通だったのです。それが小学校六年生までその気持ちでいました。

中学生になり、総合的学習の時間に福祉の勉強をしてから次第にその気持ちが薄れていきました。思春期を迎え、大人に近づいていくにつれ、姉を見る目が変わっていくようになりました。姉は姉で一生懸命生きていて、これもまた人間の尊い姿なんだと思えるようになっていくようになりました。

小さい頃から姉のいろいろな行事に連れて行かれて、いろんな障害のある姉の友達を見ていました。中学二年生になり、養護学校の夏祭りに行ったとき、去年とは違う見方ができるようになっている自分に気づきました。今まであれ程、毛嫌いしていた障害のある人達を、障害のある子どもを育てている親と同じように見ることができるようになりました。

今年高校生になり、この作文を書いているうちに姉に対する思いが今までと違う自分に気づきました。例えば、今まで姉の顔を見て、話しかけることなんてできなかったのに、今では普通に話しかけたり、言葉にならない声を聞き分けて、姉の気持ちが少しわかるようになってきています。

姉がいることにより、世の中に対して気づいたことがあります。障害の有無や普通の人と違うことによる差別をしない、お年寄りに対する気づかいができていない世の中になっていると思います。だから母はそんな世の中の人達の意識が変わるように活動していると思っています。だから、世界のみんなが優しい心を持って生きていって欲しいと思います。



主催：(社福) 全国重症心身障害児(者)を守る会

平成 18 年度重症心身障害児(者)兄弟姉妹支援事業 きょうだい作文集より